

茶 ハマキムシ類について



図1 チャハマキ成虫（上が雌、下が雄）



図2 チャノコカクモンハマキ成虫（左：雌、右：雄）



図3 チャノコカクモンハマキ幼虫



図4 ハマキムシ類による巻葉被害

1 生態

本県で茶を加害するハマキムシ類はチャノコカクモンハマキ、チャハマキの2種である。チャノコカクモンハマキの雌成虫は体長約10mm、雄成虫はそれよりもやや小さい。体色は褐色をしており、前翅には茶褐色の帯状斑が斜めにみられ、前翅端部に三角形の斑が認められる。なお、雄成虫には前翅前部に星形の斑がみられるが、形状は個体差がある。

チャハマキ成虫は雌雄で体色、体型がことなる。雌の体長は約15mm、体色はやや光沢がある褐色である。前翅中央付近よりやや翅の幅が狭くなり、端部に向けて広がる。雄成虫は約13mm、やや光沢がある暗褐色～褐色。前翅前部に前縁褶がみられる。

チャノコカクモンハマキの卵は葉裏に魚鱗状に産み付けられる。幼虫は頭部が黄褐色で体色は緑色、老熟幼虫の体長は約20mmとなる。チャハマキの卵は葉表に魚鱗状に産み付けられる。幼虫は頭部が黒褐色、体色は緑暗色で老熟幼虫の体長は約25mmである。孵化幼虫は2枚の葉をつづり合わせ食害する。いずれのハマキムシも年4回程度の発生で、最終世代の中齢幼虫は巻葉内部で越冬する。

2 発生状況

越冬幼虫は温暖な日には巻葉内で摂食して生育し、越冬世代成虫は4月頃より発生する。年間の世代数は4世代と考えられ(図5)、各世代の最盛期は、5月上旬、6月下旬、8月上旬、9月中旬頃に認められる。生育適温である25℃では、いずれの種も卵期間約7日、幼虫期間約18日、蛹期間約8日である。

ハマキムシ類は茶のほか、カキやカンキツ、常緑樹など花木も加害する。チャでの被害は幼虫が複数の葉をつづり合わせて内部を食害することにより発生する。チャノコカクモンハマキは若葉を、チャハマキは成葉や古葉を好んで食害する。

チャノコカクモンハマキは孵化後ただちに分散し、複数枚の葉をつづり合わせて食害する。チャハマキはチャノコカクモンハマキほど分散しないため、いわゆる坪枯れ状の被害となる。

摘採などの管理により、幼虫や卵塊が除去されると、隣接したほ場でも、発生消長が異なる場合があるため注意する。

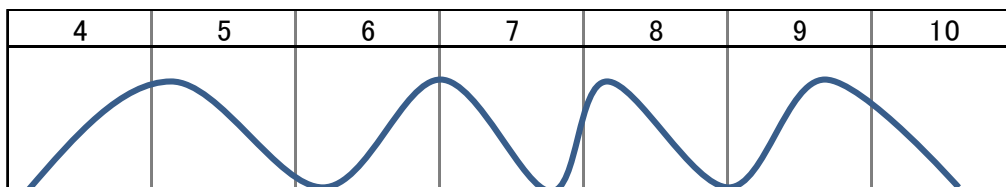


図5 ハマキムシ類成虫発生消長

3 防除対策

(1) 適正な管理

二番茶以降摘採しない園や放任園など、管理不十分な園では夏期以降多発することがあるため、注意する。

(2) 交信攪乱剤

交信攪乱剤を使用する場合は、越冬世代成虫の発生前から設置する。

(3) 薬剤防除

葉をつづり合わせると、薬液が掛かりにくいいため、ふ化期～若齢幼虫期に防除を実施する。チャノコカクモンハマキとチャハマキの同時防除を行うことが通常だが、年や時期によって発生消長が異なることがあるため注意する。なお、薬剤抵抗性発達を避けるため、同一系統薬剤の連用は避ける。